

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00005

研究課題名（和文）西欧十三世紀における勇氣と節制の概念

研究課題名（英文）The Virtues of Courage and Temperance in 13th century Europe

研究代表者

周藤 多紀（Suto, Taki）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：50571733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：現存する三つの写本資料に基づいて、ディンスデールのヨハネスの『倫理学註解』第三巻の批判校訂版を完成させた。校訂版の作成にあたって、ヨハネスが参照した資料や同時代の『倫理学註解』との比較研究を行い、その成果を国内の研究会と海外の国際学会で発表し、ヨハネスの『倫理学註解』の特徴と重要性についての考察を深めた。ヨハネスやバリの学芸学部教師の註解で時折目立つ「モドゥス」というタームの理解を深めるために、トマス・アキナスの多様な「モドゥス」の用法について考察し、成果を論文にまとめた。マレンボンによる中世哲学の入門書を訳出しながら、中世哲学の研究方法についても反省的考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

13世紀後半の写本資料を校訂することで、内外の中世哲学研究者がより容易に研究をすすめるための手段を提供した。そしてキリスト教道徳から切り離された形で展開されていた倫理学の議論の在り方とその形成史を明らかにすることで、理性に基づいて議論をすすめるという、西洋哲学の主潮流の一側面を内外の研究者に示した。またトマス・アキナスにおけるモドゥスの概念を分析することで、後の西洋哲学で重要な役割を果たす概念がもつ豊かな内容と歴史を明らかにした。さらに、マレンボンの中世哲学史入門書の訳出によって、日本の一般の人々にも、西洋哲学の源流を成す中世哲学についての知識を得る手段を提供した。

研究成果の概要（英文）：Based on three existing manuscripts, I completed a critical edition of John Dinsdale's commentary on Book III of the Nicomachean Ethics. While making this critical edition, I carried comparative studies of his commentary, his sources and his contemporary Ethics commentaries. Through the research, I obtained more clear views on the significance and characteristics of his commentary. I presented the results of my consideration in academic meetings inside and outside Japan. To have better understanding the word "mode", which is used sometimes distinctively in the Ethics commentaries, I analysed different uses of "mode" in Thomas Aquinas and wrote a couple of articles about this subject. Besides, I made reflective consideration on the ways to study medieval philosophy, while translating John Marenbon's good introductory book on medieval philosophy into Japanese.

研究分野：西洋中世哲学史

キーワード：校訂版 写本 倫理学 13世紀

## 1. 研究開始当初の背景

十三世紀の西欧倫理思想の研究は、校訂版の作成とともに、トマス以外の思想家の研究が進展を見せている。近年、これまで写本でしか読むことができなかった『ニコマコス倫理学』注解書の校訂版が相次いで出版され、関連研究が発表されている。十三世紀前半の注解については、校訂版が出版されているか、出版されていなくても校訂作業と研究がすすんでいる。また、十三世紀後半にパリ大学学芸学部で書かれた注解は、ヤコポ・コスタ (Iacopo Costa) が精力的に校訂版の準備と研究をすすめている。それに対して、同時期にオックスフォード大学学芸学部で書かれた注解の研究は、ほとんど手つかずの状態であり、研究論文で短く言及されるにとどまっていた。ディンスデールのヨハネスの『倫理学注解』は、十三世紀後半に書かれたアリストテレスの『ニコマコス倫理学』注解の中で、オックスフォード大学学芸学部で講義されたことが確実な唯一の作品であり、その校訂版の作成と研究は、同時期のオックスフォードやパリでの哲学的倫理学の展開についての理解を深めるために不可欠である。

## 2. 研究の目的

本研究は、十三世紀後半のオックスフォード大学学芸学部で、勇気と節制の徳がどのように論じられていたのかを解明することを主要な目的としていた。とりわけ、写本でしか読むことができず、ほとんど研究されてこなかった十三世紀後半のオックスフォードの思想家ディンスデールのヨハネスの『ニコマコス倫理学』注解書の第三巻の校訂版を作成して、その内容を明らかにすることを意図した。また、ディンスデールのヨハネスが引用したり、参考にしたりしている資料を特定し、当時の勇気や節制の徳の概念がどのような仕方でも形成されたのかを明らかにすることも意図した。さらに、同時代にパリ大学学芸学部で書かれた『倫理学注解』と比較することによって、パリとオックスフォードの間の思想上の影響関係についても考察することも目的としていた。

## 3. 研究の方法

本研究では、目的達成のために、ディンスデールのヨハネスの『倫理学注解』第三巻の校訂版を作成しながら関連研究を行った。2020-2021年度はコロナウイルスの世界的流行により海外渡航が困難だったため、海外での写本調査や学会参加は取りやめ、自宅や研究室で可能な研究や学会・研究会参加を行った。zoomにより国内学会だけではなく、海外(イギリスやポーランド)の学会にも参加し、最新の研究動向を知るように努めた。

### (1) 校訂版の作成

ディンスデールのヨハネスの『倫理学注解』の現存する三つの写本(ダラム司教座聖堂図書館、ケンブリッジ大学図書館、オックスフォード大学図書館所蔵)のデジタル画像から第三巻のテキストの書写を完成させた。

上記三つの写本の読みを基に、校訂版の本文テキストを作成した。また、写本によって異なる読みを記録した校訂注 (apparatus criticus) を作成した。

ディンスデールのヨハネスが言及しているアリストテレスやキケロの著作からの引用箇所を調べ、その影響を考察した。また表立って引用という仕方とはとられていないが、これまでの研究から影響関係があることが明らかになっているアルベルトゥス・マグヌスの『倫理学注解』、トマス・アキナスの『神学大全』と『倫理学注解』、同時代にパリ大学学芸学部で書かれた『倫理学注解』との比較研究を行った。以上の考察の成果を基に引用・参照注 (locus fontium) を作成した。

最終的な本文の読みを確定し、注を確認した上で、ラテン語校正を依頼した。校正者が指摘した問題点を再検討・修正して校訂版全体を完成させた。

### (2) 論文の執筆

で作成したテキストを基に、ディンスデールのヨハネスの生と死、節制や勇気をはじめとする徳との関係を分析した。またオックスフォードとヨーロッパ大陸(パリ)の思想上の類似性と相違点について考察した。以上の成果を京大中世哲学研究会と国際中世哲学学会大会で発表して論文にまとめた。

### (3) 報告書の作成

本研究のまとめとして、校訂したテキストと短い論考を掲載した報告書を作成した。

## 4. 研究成果

### (1) ディンスデールのヨハネス『倫理学注解』

2017-2020年度に作成したディンスデールのヨハネスの『倫理学注解』第二巻の校訂版及び序文を *Recherches de théologie et philosophie médiévales* に投稿し、受理された。校訂版及び序文についての査読コメントにより、写本間の関係や校訂版作成の方針について考察を深めることがで

きた。

ディンステールのヨハネスの『倫理学注解』第三巻の現存する三つの写本（ダラム司教座聖堂図書館、ケンブリッジ大学図書館、オックスフォード大学図書館所蔵）を画像に基づいて書写し、その内容を比較検討して校訂テキスト及び校訂注を作成した。またこの注解のなかで引用されたり、注解の議論を執筆するうえで参考にされている資料を同定して引用・参照注を作成した。校訂テキストの作成にあたっては、自分でダブルチェックを行うとともにラテン語校正を依頼して正確性を期した。そして作成した校訂テキストに内容の重要部を紹介する短い論考を添え、末尾にヨハネスの『倫理学注解』と（エアフルト大学図書館に所蔵されている）同時代のパリ学芸学部教師の『倫理学注解』で論じられている全問題のリストを付した報告書を作成した。報告書は、中世の『倫理学注解』を研究している内外の研究者に送付して、研究成果を共有するとともに意見交換をはかった。

また、作成したテキストをもとに同時代にオックスフォードやパリで書かれた倫理学注解との比較研究を行った。未出版の『倫理学注解』については Gallica など提供されている画像資料を用いた。比較研究の結果、ヨハネスの注解をはじめとしたオックスフォードの注解は、パリで書かれた注解に類似しているが、現世の生に焦点を絞り、神学的要素を排除した哲学的探求を行うという姿勢をパリの注解よりも鮮明にしていることが明らかになった。こうしたヨハネス（オックスフォード）の思想の「革新性」について、国内研究会ついでパリで行われた国際中世哲学会大会のセッション「中世の倫理学注解における革新的思想」で発表し、高い評価を得た。国際中世哲学会大会の同セッションは、私が 2018 年にアイデアを出して企画されたもので、13 世紀～14 世紀にかけての『倫理学注解』（その大半が未公開のもの）を研究している世界各地（アルゼンチン、カナダ、イタリア、フィンランド、チェコ、日本）の研究者が集い、研究発表と質疑応答が行われた。当日の発表原稿（英文）は修正のうえ、論文のなかで考察している未公開のパリの『倫理学注解』（ms. BnF 16110）のテキスト校訂版を添えて、今後発刊が予定されている学会論集（Brepols から出版予定）に投稿した。

以上のテキスト校訂と並行して、注解の対象であるアリストテレス『ニコマコス倫理学』の徳論や、影響関係の有無が問題となるストア派の徳論の研究もすすめた。また、ヨハネスの勇気や節制といった徳概念の現代的意義を考察するために、現代の徳理論についても知見を得るようにつとめた。そして、2022 年 10 月に開催された関西哲学会大会の共同討議「徳について」古代ギリシアと現代の徳理論の二つの提題からなる 〆の司会をつとめた。

## （2）「モドゥス（modus）」の概念

ディンステールのヨハネスは『倫理学注解』の第三巻で、すべての徳が備えている「節度」について「すべての徳の様態（modus）」という発言をしている。多くの部分で、トマス・アクィナスを（時としては文字通りに）踏襲しているヨハネスの注解だが、トマスは同様の文脈で「様態（モドゥス）」という語を用いていないことが指摘・注目されている。ヨハネスの『倫理学注解』での「モドゥス」の用例は数が限られており、ヨハネスが大幅に依拠しているトマスの著作にはモドゥスの用例が多数あることから、トマスの「モドゥス」の用法とその歴史的源泉について分析することにした。2021 年秋に zoom 上で開催された中世哲学会大会において「徳のモドゥス」について発表し、論文を公表した。トマスの「モドゥス」を論じた先行研究はないわけではないが、各カテゴリーに対応する「存在のモドゥス」に着目したものがほとんどであり、「徳のモドゥス」に着目したものは皆無であった。しかし「徳のモドゥス」は、トマスの体系のなかで存在論・倫理学・意味論の領域にまたがって使用されている。発表や論文では「徳のモドゥス」の考察をとおして、「モドゥス」がアナログの基礎にあることを明らかにした。その後、トマスの「モドゥス」の存在論的側面、倫理的側面、意味論的側面のそれぞれについて「モドゥス」用例を確認しながら丁寧に再考・考察し、存在論的側面については 2022 年 7 月に、倫理的側面については 2023 年 3 月に発刊された『哲学研究』で論文を公表した。

## （3）中世哲学史全般と中世哲学史研究の手法

2020 年 4 月から 2021 年 5 月にかけて、John Marenbon 著 *Medieval Philosophy, A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2016 を日本語に訳出し、推敲を重ねた。また訳注や補図を加え、解説も執筆した。そして 2023 年 2～4 月にかけて校正作業を行い、5 月にジョン・マレンボン『哲学がわかる 中世哲学』（岩波書店）として出版した。同書はイギリスの中世哲学史研究の第一人者による、中世哲学の全領域についての見通しを与える、すぐれた入門書である。同書の翻訳と出版によって、日本の一般の人々にも中世哲学に関して信頼できる情報を提供することができた。

ジョン・マレンボンは上掲書をはじめとした著作で、中世哲学史を研究する方法として「歴史的分析（historical analysis）」を提唱している。「歴史的分析」とは、中世哲学の議論を現代の問題との関連で分析するとともに、その議論がなされた過去のコンテクストを探求して、中世哲学の議論そのものの精確な理解と説明に努める手法である。私は 2020 年秋から「歴史的分析」も含めた、過去～現在までの中世哲学史研究の方法について調査・考察し、2021 年 3 月に「方法論研究会」で発表した。「方法論研究会」は京都大学文学研究科内の複数分野の教員（国語学、東洋史学、社会学、科学哲学、西洋哲学史）で編成された研究会で、約 2 年間にわたって人文学の方法論について討議を重ねた。私は上述の研究会で西洋中世哲学史研究の方法論について発

表を行った。発表では、西洋哲学史研究のアプローチを、目的別に(A)歴史志向型、(B)比較志向型、(C)実践志向型の三つに分けたうえで、上述の「歴史的分析」や「分析的アプローチ」とともに、大陸系のアプローチ「中世主義」や「現象学的アプローチ」や「新スコラ主義」についても紹介し、今後の西洋哲学史研究の方法論について考察を深めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 周藤 多紀	4. 巻 608
2. 論文標題 トマス・アクィナスの《モドゥス》研究（一） 《モドゥス》の存在論的側面	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/JPS_608_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 周藤 多紀	4. 巻 609
2. 論文標題 トマス・アクィナスの《モドゥス》研究（二） 《モドゥス》の倫理的側面	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 34-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/JPS_609_34	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 周藤 多紀	4. 巻 30
2. 論文標題 トマス・アクィナスにおける徳のモドゥス	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学哲学研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.13039/501100001691	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Taki Suto	4. 巻 -
2. 論文標題 John of Dinsdale, Quaestiones super Librum Secundum Ethicorum	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Recherches de Theologie et Philosophie Medievales	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 周藤 多紀
2. 発表標題 西洋哲学史研究の方法 西洋中世哲学史研究からの問題提起
3. 学会等名 人文学の方法論 第二回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 周藤 多紀
2. 発表標題 トマス・アキナスにおける徳のモドゥス
3. 学会等名 中世哲学会第70回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 周藤 多紀
2. 発表標題 ディンスデールのヨハネスの『倫理学注解』における生と死
3. 学会等名 第270回京大中世哲学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Taki Suto
2. 発表標題 The Best Life in John of Dinsdale 's Ethics Commentary: The Radicality in John of Dinsdale 's Quaestiones super Librum Ethicorum
3. 学会等名 The XVth International Congress of Medieval Philosophy, Societe Internationale pour l'etude de la Philosophie Medievale (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ジョン・マレンボン、周藤 多紀	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 238
3. 書名 哲学がわかる 中世哲学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------